

もう年末であると数日すれば新しい寅歳を迎えることになる。今年もあまりよいニュースはなかった。だがWEB11としては嬉しい事があった。3人の新たな投稿者を迎えたことである。即ち柳川、篠窪、藤本の御三方が加わり、旧交を温めることになったのだ。

● 窓際で本読む女の頬白く診察待ちの時は過ぎ行く

診療所にはあまり重症の患者はこない。大抵が風邪とか腹具合が悪いといった程度なので待ち時間があっても気楽である。

● 閉ざされし二階の雨戸主人らは開ける事なし早老いたれば

わたしの住む通称グリーンタウンは昭和五十七年に開発され、初代の入居者が引続き住んでいる家が殆どである。

● 藁を焼く匂い懐かし故郷は箱根の麓酒匂流るる

稲を刈り終わると藁を焼く。田圃を覆う煙は風に流され、県道をバイクで走る私の元へなつかしい香りを運んで来る。

● 欠礼の葉書は告げるまたひとり同じ世代が黄泉へ発てりと

何時かは自分の番が巡って来るのだが、果たしてその時に誰が欠礼のハガキを出してくれるのか、あるいは出す相手が残っているのか。

● 聞ゆるは風切る音のみひたすらに走り続ける直ぐな我が道

私は二輪車が好きで、50cc、クロスバイク、ママチャリを使い分けている。テニスコートへ通う七二一号线は数キロに渡って直線である。バイクでも自転車でも、走るときの感覚は同じで、自分の人生の様だといつも感じる。

● 薄野に鋭き雉の声響き禅杖一打受けたるごとし

すすきの
薄野を歩いている時にケーンと言う雉の音がまじかに響き、ハッと我に返った

